

ヤマタノヲロチの正体を探る

スサノヲ伝説と

たたたら製鉄の

関係とは？

出雲は、国譲り神話以外にももうひとつ、誰もが知る神話の舞台になっている。ヤマタノヲロチ退治の伝説が残る奥出雲は、古墳時代から続いた製鉄の地でもあった。

取材協力／石原淳子

(奥出雲町協働商工観光課)

案内人



石原淳子さん

奥出雲町役場商工観光課勤務と同時に、奥出雲たたらと刀剣館の案内を務める。奥出雲に来て8年。町内施設にて町の伝統産業であるたたらやそばんについての案内に努めている。

POINT

形はどう決めた？

皇室が宝とする三種の神器のひとつ、草薙剣がどういう姿かは誰も見ていないためわからない。この模剣では、古代の発掘品などを参考に、往時の姿を想像して製造。神楽で使用するため、刃は付けていない。

POINT

素材は何？

奥出雲町の日刀保たたらにて、町内で採取した砂鉄を原料に作られた玉鋼製の剣。たたら製鉄では純度もさまざまな鉄が採れるが、良質な玉鋼は、1回の操業で砂鉄10tから、わずか1割程度しか出来ない。

「製鉄神であったスサノヲがこの奥出雲に降りたのです」
この地に降りたスサノヲが製鉄技術を伝えたのか

日本で製鉄が始まったのは6世紀頃だ。大陸伝来の製鉄法は鉄鉱石から精製するものだった。しかし日本では豊富な砂鉄を使い、野だたらという小規模なたたらで作った。神武天皇の皇后はヒメタタライスズヒメ（姫踏輪五十鈴姫）。製鉄の重要性を示唆する名かもしれない。

たたら製鉄とは粘土の炉に木炭と砂鉄を入れ、高温で燃やし続けることで鉄を得る方法。中国山地には風化した花崗岩が多く、とくに奥出雲町では良質な真砂鉄が採れ、現在も使われている。木炭を作る樹木も豊富だ。風土記でもこのエリアの鉄は最も質が良いという記述がある。「砂鉄は山の斜面を崩した土砂を水に流して採りました。1%ほどしか含まれない砂鉄は沈み、不要な土砂は下流に流れます」と、奥出雲たたらと刀剣館を案内してくれた石原淳子さん。鉄穴流しというこの手法は中世以降大規模化し、たたらも大型

1000年の歴史を誇る技

おくいずもたたらと刀けんかん

奥出雲たたらと刀剣館

古代からの製鉄の地であり、今も日本刀の素材となる玉鋼を生産する奥出雲の製鉄の歴史を展示。現在も操業する日刀保たたらの実物大模型は必見だ。木炭を効率良く燃やすすふいこの稼働体験もできる。

奥出雲町横田1380-1 TEL:0854-52-2770
開館時間:10時~17時(入館は~16時30分)
休館日:月曜(祝日の場合は翌日) 入館料:大人530円(刀剣鍛錬実演は1270円)

POINT

何に使ったのか？

奥出雲町内の神楽社中のため作られ、船通山での剣舞に使用されたこともある。重さは約1kgある。神話ではオオクニヌシも使用しているが、本物の草薙剣がこのようなものであるなら祭祀用であろう。



木次駅近くの温泉施設に高く掲げられていたヲロチのモニュメント。ここより奥が伝説の地だ。

旅の視点

- Q 斐伊川とヲロチの関係とは？
- Q たたら製鉄の歴史とは？
- Q 流域に形成された文化とは？

草薙剣の想像模剣

平成24年(2012)に神楽舞用に製作した古代風の刀は、草薙剣を想定復元したもの。スサノヲが天降ったとされる船通山の頂上でも、この剣を使った神楽が奉納された。

斐伊川

「ひいがわ」



奥出雲の山間から宍道湖へと流れ込む、出雲を象徴する川。古代には山陽方向に抜ける船運ルートでもあった。氾濫が多く、幾筋にも分かれたためヤマタノヲロチを意味したとも。

「製鉄が変えた流域の風景に ヲロチ伝説が点在しています」



ヲロチが棲んだとされる天が淵。川がカーブする部分の深い淵だ。周囲には、南に面した日当たりのよい棚田が広がる。古代はもっと狭い谷だったろう。

化した。「江戸から明治にかけては全国生産の4割ほどの鉄を奥出雲で作っていたといわれています」
スサノヲはこの地でヤマタノヲロチを退治した。尾から出た鉄剣は草薙剣として宮廷に献上された。また、『日本書紀』の一書では、スサノヲが館からも見える鳥上の峰（船通山）に天下る前は新羅にいたとされる。新羅の最新技術を伝えた神なのか？
「そう、スサノヲは製鉄神です。たたら製鉄とヤマタノヲロチにも深い関係があると考えられます」
ヤマタノヲロチが何を表すかには諸説ある。たびたび氾濫を起こす暴れ川だった斐伊川のことだとするものが最も一般的。だが氾濫の原因には鉄穴流しによる土砂の堆積もある。また「越のヤマタノヲロチ」の記述から現在の新潟方面から来た製鉄部族だったとの説もある。しかし石原さんの考えはもっとシンプルだ。
「たたらから流れ出る鉄滓は赤黒く燃え、ただならぬものを感じさせます。小さな穴から炬の状態を見るため、目をつぶす人も多かったよう

です。ヲロチの血に爛れた腹、ホオズキのような赤い目は製鉄工程そのものを表し、それを制御した神をスサノヲとしたのではないのでしょうか」
たたら場では今も製鉄をもたらした金屋子神という女神を祀る。『日本書紀』には記載のない神である。

長く続いたたたら製鉄が 出雲の地形をも変えた

雲南市から仁多郡奥出雲町にかけての斐伊川上流域には、ヲロチ伝説の場がいくつも残る。例えば天が淵はヲロチが棲んでいた場所。温泉神



印瀬の壺神

壇に囲まれた中に河石が詰まれている。ここにヤマタノヲロチに酒を飲ませた壺のひとつが埋められているそうだ。掘ろうとすると祟りがあるという。他の7つの壺は伝承されていない。



八口神社

山里の農村部のかなり奥まった場所。写真で見える鳥居から上った先が小さな社。スサノヲとクシイナダヒメを祀っている。ヲロチの8つの頭を切り落としたことから八口の名がついた。

社ではスサノヲの妻となるクシイナダヒメの両親を祀っている。八口神社の境内にある印瀬の壺神は、ヲロチを酔わせた酒を入れていた壺のひとつが埋められているという。

点在するそれらを巡ると、伝説の地がいかに広いか、つまりはたたら製鉄がどれほど広範囲で行われていたかが実感できる。コンビニひとつない、のどかな風景が続くエリアである。谷あいでありながら周囲は開け、とても明るい。ゆつたりとした棚田が続く、農地の豊かさを感じさせる。そういえば斐伊川上流で栽培される仁多米は食味の良さで有名だ。そしてふと気づく。クシイナダヒメの名は、素晴らしい稲田を表している

立ち寄り処

「出雲国風土記」に記載がある

湯村温泉 ゆむらおんせん

『風土記』には玉造、湯村、海潮の3つの温泉の記載がある。玉造温泉は今や一大観光地だが、奥出雲ではぜひとも、河原に沸く「漆仁の薬湯」と記載された湯村温泉に立ち寄りた。共同湯は今や1軒だけの宿の前。オープン時間の10時前にはマニアと思われる客も数人いた。そばの河原には野天の湯もある。訪れた日は残念ながら豪雨による増水で確認できなかった。

雲南市吉田町川手



上/わずかに残る川沿いの細道の風情がいい。川を望む露天風呂もある。下/ヤマタノヲロチのモチーフを散策中に発見。

「砂の器」で知る地での昼食

かめだけえきないのおぢやそば 亀嵩駅内の扇屋そば

奥出雲へと走るJR木次線に亀嵩という駅がある。「かめだけ」と読む。松本清張の『砂の器』では、その地名の読み方がカギになった。ここは1973年から国鉄職員のいない民間委託駅となり、そば屋を兼ねるようになった。現在の店主・虹隆吉さんの父が始めたそうだ。手打ちのそばはなかなか旨い。予約すれば電車到着時間に合わせたそば弁当も用意してくれる。

奥出雲町郡340



つゆを自分で加減して入れる釜揚げそば(860円)は出雲独特。もちろん割子そばもある。



須我神社

奥出雲地域からは東、熊野大社に近い場所にある。ヲロチを退治した後、スサノヲとクシイナダヒメが住んだ場所として日本初の宮とされる。意宇六社の八重垣神社はその後に合祀された。



温泉神社

クシイナダヒメの両親であるアシナツチ(脚摩乳)・テナツチ(手摩乳)を祀る。この土地に暮らす農民の長だったのだろうか。参道は立派で広く、周囲の農地は古くからの豊かさを感じさせる。